三体詩

下

村上哲見

監修　吉川幸次郎

新訂　中国古典選

三体詩 下

村上哲見

朝日新聞社

著者略歴
1930年大連市に生まる
京都大学文学部卒業
現在京都教育大学助教授
著書—「李煜」(岩波書店)

新訂　中国古典選　第17巻

三 体 詩　下　　定価 650 円

発　行　　昭和42年 4 月 1 日　第 1 刷

著　者　　村　上　哲　見

発行者　　朝日新聞社　足田輝一

発行所　　東京　名古屋　大阪　北九州　朝日新聞社

印刷　内外印刷　　製本　古川製本

©村上哲見　1967　　装幀　原　弘

目次

五言律詩

四　実　1

早春の遊望　杜審言　4
少林寺に遊ぶ　沈佺期　6
晩に華陰に至る　皇甫曽　8
廃せる宝慶寺を経　司空曙　10
北固山の下に次る　王湾　12
丘陽の晩景　張均　15
晩に五渓を発す　岑参　17
仲夏　江陰の官舎にして、裴明府に寄す　李嘉祐　19
山行　殷遙　21
陸明府が盱眙に之くを送る　崔峒　23
渓南の書斎　楊発　25
楊子の岸に泊す　祖詠　27
新秋　楽天に寄す　劉禹錫　29
秋日　客を送りて、潛水の駅に至る　劉禹錫　31
得日観の東房　李質　33
北固の晩眺　竇常　35
可久が越中に帰るを送る　賈島　37
新安の江行　章八元　39
三月五日、長沙の東湖に泛ぶ　張又新　42

人の蜀に入るを送る　李遠　44
七里灘　許渾　47
孤山寺　張祜　49
恵山寺　張祜　51
蒲澗寺の後の二巖に登る　李群玉　53
僧の南海に還るを送る　李洞　55
鄂北の李生が舎　李洞　58
塞上　司空図　60
永嘉の崔道融に寄す　司空図　62
霊渓館に泊す　鄭巣　64
甘露寺　孫魴　66
江行　李咸用　69
春日の野望　李中　72
勝果寺　僧処默　74
静林寺　僧霊一　76
秋夜　梁鍠が文宴に同ず　錢起　79
秦川を望む　李頎　82
池上　白居易　84
西陵の夜居　呉融　86
旅遊に春を傷む　李昌符　89
春山　僧貫休　90
懐州の呉別駕を送る　岑参　92
高宮谷にして鄭鄂に贈る　岑参　95
山居即事　王維　97
薦福寺の衡岳禅師の房に題す　韓翃　99
史沢の長沙に之くを送る　司空曙　101
裴侍御の上都に帰るを送る　張謂　103
蕭関を過ぐ　張籍　105
秋夜　僧院に宿す　劉得仁　108
宣義の池亭に宿す　劉得仁　110
殷堯藩が山南に遊ぶを送る　姚合　112
李疑が幽居に題す　賈島　114
金山寺　張祜　117
商山の早行　温庭筠　119

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

秋日　方干の上元に遊ぶを送る　曹松　122
陸睦州に寄す　許棠　124
崔員外と秋に直す　王維　127
東川の李使君を送る　王維　130
楊長史が果州に赴くを送る　王維　132
京に赴く途中にして雪に遇う　孟浩然　135
早行　郭良　137
荊溪館に宿して、丘義興に呈す　厳維　138
漂母の墓　劉長卿　140
湖中の閑夜　朱慶余　142

四　虚　145

陸渾の山荘　宋之問　147
新年の作　宋之問　149
鮑禅師の竜山自り至るを喜ぶ　劉長卿　150
秦系に酬ゆ　劉長卿　152
朱放が賊退いて後、山陰に往くを送る　劉長卿　154
南溪の常道人が隠居を尋ぬ　劉長卿　156
元録事が所居に題す　劉長卿　158
霊一上人に寄す　劉長卿　160
除夜　石頭の駅に宿る　戴叔倫　163
汝南にして董校書に別る　戴叔倫　165
江上にして張勧に別る　戴叔倫　167
丘為が落第して江東に帰るを送る　王維　169
丘州にして司空曙に逢う　李端　171
洛陽の早春　顧況　174
陸羽を送る　皇甫曽　175
喬尊師に贈る　張鴻　177
客中　于武陵　179
長安の春日　曹松　180
破山寺の後院に題す　常建　183
暮に山村を過る　賈島　185
山中の道士　賈島　186
山中の日南の僧に贈る　張籍　188

田　家　章孝標　190
秦原の早望　章孝標　191
前虚後実　193
雲陽の館にして韓升卿と宿別す　司空曙　195
暢当に酬ゆ　耿　湋　197
友人に寄す　張　蠙　199
喩坦之が睦州に帰るを送る　李　頻　200
李給事が徐州に帰りて覲省するを送る　孫　逖　202
溧水の唐明府を送る　韋応物　205
王録事が虢州に赴くを送る　岑　参　207
鄭蟻に別る　郎士元　209
韓司直を送る　皇甫冉　211
途中にして権・曙を送る　皇甫曽　213
普・選二上人に酬ゆ　厳　維　215
鄭宥が蜀に入るを送る　李　端（厳維）　218
杭州の郡斎の南亭　姚　合　220
日東の病僧　項　斯　222
友人の下第して帰覲するを送る　劉得仁　223
南遊して感有り　于武陵　225
早春　華下の同志に寄す　裴　説　227
途中にして孫璐に別る　方　干　229
友の及第して浙東に帰るを送る　方　干　231
春　宮　杜荀鶴　233
崔尚書を辞す　李　頻　235
下　方　司空図　237
華下にして文涓を送る　司空図　239
東林寺に遊ぶ　黄　滔　241
僧の嶽に還るを送る　周　賀　243
人の蜀に帰るを送る　馬　戴　245
周処士が故居を経　方　干　247
人の山に帰るを送る　石　召　248
友人の宜春に帰るを送る　張　喬　250
秋日　王長史に別る　王　勃　252

汝墳の別業　祖　詠　254
宣州の使院にして、韋応物に別る　劉長卿　256
陸潛夫が延陵に友を尋ぬるを送る　皇甫冉　258
夏夜　西亭の即事　耿　湋　260
庭の春　姚　合　262
新　春　姚　合　263
晩春　厳少尹諸公に過らるに答う　王　維　265
王正字が山寺に書を読むを送る　李嘉祐　267
秋日　徐氏が園林に過る　包　佶　269
灞東の司馬が郊園　許　渾　271
下第して崇聖寺に寓居す　許　渾　274
山中の高逸人に寄す　孟　貫　276
廬嶽の隠者　杜荀鶴　277
司空図に寄す　僧虚中　279
成州の程使君を送る　岑　参　281
漢陽の即事　儲光羲　283
劉員外が寄せらるに酬ゆ　厳　維　286
至弘上人に別る　厳　維　288
王牧が吉州に往いて史君叔に謁するを送る　李嘉祐　290
章彝が下第するを送る　綦毋潛　292
空寂寺にして元上人を悼む　錢　起　295
曹椅を送る　司空曙　297
金華の王明府を送る　韓　翃　299
張侍郎が馬尚書に酬ゆるに和す　韓　愈　301
董卿が台州に赴くを送る　張　籍　304
香積寺に過る　王　維　306
友人の蜀中に尉たるを送る　徐　晶　308
諸子と峴山に登る　孟浩然　310
邢逸人に寄す　鄭　常　312
呉明徹が故墨　劉長卿　314
樊兵曹が潭州の韋大夫に謁するを送る　李嘉祐　316
西郊の蘭若　羊士諤　318

普門上人を送る　皇甫冉　320
耿処士を送る　賈島　322
春　友人の山舎に至るを喜ぶ　周賀　323
竜翔にして胡権が訪ねて宿するを喜ぶ　喩鳧　325
秋晩の郊居　任蕃　327
友人南遊して還らず　于武陵　329
夜　淮陰に泊す　項斯　331
秋夜　淮口に宿す　景池　332
村行　姚揆　334
甘露寺に題す　曹松　336
前実後虚　338
秋夜の独坐　王維　339
秋夜　舟を泛ぶ　劉方平　341
春日　病いに臥して懐いを書す　劉商　342
林館に暑を避く　羊士諤　345
柏梯寺にして旧僧を懐う　司空図　346
早春　司空図　349
江行　司空図　351
春日　李咸用　353
雲居の長老　王貞白　355
許棠を送る　張喬　357
穆陵関の北にして、人の漁陽に帰るに逢う　劉長卿　359
早行　朱放に寄す　戴叔倫　361
陝州の河亭にして、韋大夫に陪して眺望す　劉禹錫　363
巴南の舟中　岑参　365
関西の客舎に宿して、厳・許二山人に寄す　岑参　367
夜　竜吼灘に宿して、峨嵋の隠者を思う　岑参　369
南亭にして鄭侍御が東台に還るを送る　岑参　371

南渓の別業　岑参　373
舟を盱眙に泊す　常建　375
江南の旅懐　祖詠　376
冬日の野望　于良史　378
早行　劉洵伯　380
鄱公に逢う　周賀　381
暮に山寺を過る　賈島　383
永楽の殷侍御を懐う　馬戴　385
韋処士が山居　許渾　387
瀑布寺の貞上人が院　鄭巣　389
竜州の樊史君を送る　許棠　390
人の黔中に尉たるを送る　周繇　392
道院　王周　394
一意　396
終南の別業　王維　398
晩に潯陽に泊して、炉峰を望む　孟浩然　400
茶人　陸亀蒙　402
陸羽を尋ねて遇わず　僧皎然　404
起句　406
軍中に酔飲して、沈八・劉叟に寄す　暢当　407
江陵の臨沙の駅楼に題す　司空曙　410
耿山人の湖南に遊ぶを送る　周賀　412
巴江に宿る　僧栖蟾　413
結句　415
陳法師が上元に赴くを送る　皇甫冉　417
従弟の河朔に帰るを送る　李嘉祐　419
晴るるを喜ぶ　李敬方　421
茅山　杜荀鶴　423
詠物　424
山中の流泉　儲光羲　426
冷井　孫欣　427
僧舎の小池　張鼎　429
笛を聞く　戎昱　430

秋林を感ず　姚倫　432　孤雁　崔塗　435
杏花　温憲　433　雨　僧皎然　437

付録　三体詩作者小伝付作者別作品目録　1

唐詩年表

口絵写真について

表は唐代の土偶。白い地色に、朱紅と緑の彩色が微かにのこる。豊満麗な唐美人を彷彿させる逸品である。

裏面の刊本は、わが国で流行したいわゆる増註本の最も早いもの、元刊本から直接の覆刻と推定される。通行本の祖本は通常明応三年(一四九四)刊のいわゆる明応本とされているが、実はその刊記に、その底本となった「旧刻」の存することがしるされている。この本には刊記はないが、その書品からいって、明応本にいうところの「旧刻」のわずかに世に存するものであることはほぼ間違いない(上巻解説参照)。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

五言律詩

四實

周弼曰。謂二中四句皆景物而實一。開元大曆多二此體一。華麗典重之閒。有二雍容寛厚之態一。此其妙也。稍變然後入二於虛一。閒以二情思一。故此體當レ爲二衆體之首一。昧者爲レ之。則堆積窒塞。寡二於意味一矣。

四実

周弼曰く、中四句の皆な景物にして実なるを謂う。開元大暦に此の体多し。華麗典重の間に、雍容寛厚の態有るは、此れ其の妙なり。稍〻変じて然る後に虛に入り、間うるに情思を以てす。故に此の体は当に衆体の首為るべし。昧き者之を為さば、則ち堆積窒塞して、意味に寡し。

（四実とは）中の四句、すなわち前聯後聯の対句がすべて「景物」すなわち景色もしくは事物の描写であって

「実」であるものをいう。開元・大暦のころにこのスタイルが多く、はなやかで堂々としている中に、ゆったりとひろやかなすがたがあるのが、そのすぐれた点である。この体が少しく変化してはじめて「虚」の境地に入り、感情や思考をさしはさむようになる。だからこのスタイルは、いろいろなスタイルの筆頭たるべき地位にある。詩法に通じていない者がこのスタイルを用いると、事物の積み重ねにおわってちぢこまってしまい、深い内容や味わいが乏しくなってしまう。

【補説】 律詩は八句四聯より成るが、「中四句」とはすなわち三、四、五、六の句、つまり第二聯（頷聯（がんれん）または前聯）と第三聯（頸聯（けいれん）または後聯）を指す。この二つの聯は必ず対句を用うべきところで、律詩の中核を成す部分である。「四実」とは、この四句すなわち前聯後聯の二つの対句がともに「景物」であって「実」なるものをいう。「景物」とは、具象的な景色・事物の描写と考えてよかろう。ここは次の「四虚」における「情思にして虚」と対応する。一首の中核を成す二つの対句に、具象的な描写の句（実）をおくか、感情思考を表出する句（虚）をおくかによって、詩の境地が異なってくるというのが、この「三体詩」の律詩における分類の基本的な観点である。この点については、すでに上巻巻首の解説において述べた。「開元」は玄宗の年号、七一三年より七四一年まで、「大暦」は玄宗の孫に当る代宗の年号、七六六年より七七九年まで。初盛中晩のいわゆる四唐にあてはめると、盛唐より中唐のはじめにかけてということになるであろう。その頃にこの四実の体を用いるものが多いというのは、七律の四実の解説に「唐の大中自（よ）り、此（ここ）に工（たく）みなる者亦（また）た数有り」（上巻二二九ページ）とあるのと照応する。「大中」は宣宗の年号で、八四七年より八五九年、晩唐の前半に当る。つまり晩唐以後は四実の律詩を善くするものは少なくなるというのである。つぎにこのスタイルの妙処、すぐれた点として、「華麗

典重」であると同時に、「雍容寛厚の態」をそなえているという。「典重」はきちんとしていて重々しい。「雍容」は畳韻の形容詞、こせこせしないでおちついているさま。「寛厚」は寛濶重厚、のびのびとひろやかで、どっしりしているさま。おおざっぱにいって、盛唐の詩の重厚さに比して晩唐の詩には軽妙な作が多いように思うが、「四実」の体が開元・大暦の間に多く、大中以後は少なくなるとすれば、「虚実」の表現手法の面からも、その違いはある程度説明できそうである。つぎの「稍変」の「変」は、「詩経」における「正・変」の「変」に通ずるものがあるであろう（吉川幸次郎「詩経国風上」岩波・中国詩人選集第一巻の解説など参照）。「稍変然後入於虚」というのは、裏返せばこの「四実」の体こそは「正」、オーソドックスな、基本的なスタイルであり、情思をまじえて「虚」の界に入るのは「変体」だということになる。だからこそこの体を以て、もろもろの体の「首」とするのである。これはおそらく、編者周弼の当時の詩が、中晩唐の詩風を範として、軽妙なスタイルを好んだのに対して、いわば筋目を正したものであって、当時の随筆、范晞文の「対牀夜語」のおおいに称揚する所となった所以である（上巻解説一五・一六ページ参照）。最後の一節は、ただ四実の体をまねしさえすればよいというわけではない、という注意書きである。「昧」は「明」の反対、愚昧・蒙昧の昧である。「昧者為之」とは、ここでは、詩法に通ぜざる者がこの四実の体を用いるならば、ということ。「窒塞」は七絶の「用事」のところに「詩中に事を用うる、既に窒塞し易し」とある（上巻一八〇ページ）。ちぢこまってのびのびしたところがないことをいうであろう。「意味」の「意」は詩の「こころ」と解してよい。「味」は味わい。「寡於意味」とは詩の詩たる所以の内容が乏しくなるということ。なおこの点について、「対牀夜語」では、「間実に過ぎて句未だ飛健ならざる者有り。得て以て或いは窒塞の譏りを起す。然れども鵠を刻んで成らざるも猶お鶩に類す。豈

に空疎軽薄の為すに勝らざらんや」という。つまり「実」を学んでうまくいかなくても、空疎軽薄なものよりはましだ、というのである。

早春游望　　杜審言

獨有二宦游人一　偏驚物候新
雲霞出レ海曙　梅柳渡レ江春
淑氣催二黄鳥一　晴光轉二緑蘋一
忽聞レ歌二古調一　歸思欲レ沾レ巾

早春の遊望

独り宦遊の人有りて　偏えに驚く　物候の新たなるに
雲霞　海を出でて曙け
梅柳　江を渡って春なり
淑気　黄鳥を催し
晴光　緑蘋に転ず
忽ち古調を歌うを聞き
帰思　巾を沾さんと欲す

「早春」は春のはじめ、正月をいう。「遊望」は旅の途次の眺望。この詩あるいは「晋陵の陸丞が早春の遊望に和す」と題する（「全唐詩　六二」）。晋陵はすなわち常州、今の江蘇省武進県。丞は県の副知事。陸丞という人については未詳。その人の「早春遊望」と題する詩に倡和した作である。一説に韋応物の作ともいう（「詩人玉屑」、「復斎漫録」、「全唐詩　一九五」。ただし「韋蘇州集」にはみえない）。

ただひとり、官職のために他郷に在り　気候風物の一新せるさまにふと気づいておどろく

雲と霞が海よりたちのぼって空は明けそめ　梅や柳は、長江を越えて南に来ると、はや春のすがた

和やかな春の気はうぐいすの囀りをうながし　晴れやかな日ざしは緑の蘋草の上にうつり動く

はからずもいにしえぶりの歌を拝聴し　ふるさとを慕う思いに、手巾をひたさんばかりの涙があふれてくる

「宦遊」は、仕官を求めて故郷を離れ、旅をすることをいう場合もあるが（「史記一二七司馬相如伝」に「長卿（相如の字）久しく宦遊し、遂げずして困しむ」）、ここは官職のために他郷に在ることをいうようである。韋応物の詩に「宦遊　二十載、田野久しく已に疎なり」（「休沐して東のかた曹貴里に還り、端に示す」）。第二句、「物候」は風物気候。梁・簡文帝「晩春の賦」に「物候の推移を嘆ず」。「物候新」は、春になってあたりの風物も気候もがらりと変って新鮮になったこと。「偏驚」の「偏」は、ひたすらにという強調であるが、ここでは特に自分ばかりはという気持が感じられる。あたりまえの生活をしている人には、何ということもなく受けとめられる季節の移りに、いまさらながら気がついて驚くのである。三四五六の句、すなわち前聯後聯の二つの対句は、その新たなる物候、題にいう「早春」の眺望を描く。いわゆる「中四句　景物にして実」である。前聯の「曙」と「春」とは、本来名詞であるものを、夜があける、春になる、と動詞のように用いる、いわゆる「実字虚用」である。これを名詞で結んだ句と解してはおもしろくない。第五句、「淑気」は春の気をいう。晋・陸機の「悲哉行」に「薫草　淑気饒かに、時鳥　好音多し」。「黄鳥」はうぐいすの一種、和名こうらいうぐいす。次の句、「蘋」は水中に生ずる草の名、うきくさ。梁・江淹の「美人の春遊を詠ず」詩に「江南二月の春、東風　緑蘋に転ず」。尾聯はわが身の上にたちかえる。「古調」は単に古い歌のしらべと解し得ないではないが、倡和の

詩とすれば、相手、「陸丞」の作を指すであろう。その場合は古雅な、古典的風格を備えたという、ほめたことばになる。末句は「遊望」、旅中の眺望という題に応じ、「帰思」、故郷を恋うる思いを詠じて結ぶ。

游二少林寺一　　沈佺期

長歌游二寶地一　　長歌して宝地に遊び
徙倚對二珠林一　　徙倚として珠林に対す
雁塔風霜古　　雁塔　風霜古り
龍池歲月深　　竜池　歳月深し
紺園澄二夕霽一　　紺園　夕霽澄み
碧殿下二秋陰一　　碧殿　秋陰下る
歸路煙霞晚　　帰路　煙霞の晩
山蟬處處吟　　山蟬　処処に吟ず

「少林寺」は、河南省登封県の北の嵩山（天下五嶽の一、中嶽）にある名刹。北魏、太和二十年（四九六）の創建と伝え、印度より渡来した高僧、達摩大師が面壁九年ののち入寂したところとして有名。また少林寺派拳法発祥の地として知られる。

長く声を引いて歌いつつ、尊いこの聖地に遊び　去りがてにたちもとおりつつ、珠玉の林に対する

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo